グローバル教育としての小学校社会科カリキュラムと授業モデルの開発

― 韓国小学校社会科カリキュラムを中心に ―

Development of the Elementary Social Studies Curriculum and Instruction Models for A Global Education

－Based on the Elementary Social Studies Curriculum of Korea－

田　鎬　潤（兵庫教育大学 連合大学院生）
中　村　哲（兵庫教育大学 社会系教育講座）

世界各国ではグローバルイシューや問題を解決する教育方法として、国際理解教育、人権教育、環境教育、開発教育等、多様な形態の国際教育活動を学校教育に取り組んでいる。

本研究は、W.M.クニープが提示した社会科カリキュラム理論の分析に基づいて、諸国際教育の領域を社会認識教科である社会科に統合編成して、子どもたちが国際化時代によく適応できるカリキュラムと授業構成のモデルを提示することに目的をおいた。

本研究で開発したカリキュラムモデルでは、人間と空間、人間と時間、人間と社会の３つの領域で提示されている７次カリキュラムの領域に、グローバルイシューや問題を取り組む人類と世界領域を設定して４つの領域で編成した。そして、社会現象の中核的知識内容を構造化する中心概念として文化、相互依存性、葛藤、変化の概念を選定して学習内容を組織した。また、伝統的な経験拡大法に基づきながらも、学年ごとにグローバル教育要素と関連される主題単元を設定して小学校低学年から適用できる授業モデルを開発して提示した。

キーワード：グローバル教育、人間の普遍性と多様性、相互依存性、グローバル市民

1．はじめに

1．1．問題提起と研究目的

国際的相互依存関係がますます密接になっていく今日、人類の生存に大きな影響を及ぼしている環境、エネルギー、人口、難民等の問題は一つの国家や民族だけでは解決ができないグローバル問題として台頭されている。これによって国家や民族を超える国際的視覚と国際社会に貢献する態度が汎国家的に切実に要求されているし、自国の独自な文化価値の尊重と人類共同問題の正しい認識を目指す多様な形態の国際教育活動が展開されている。

韓国では、1995 年大統領諮問教育改革委員会が「世界化・情報化時代に備えて教育の質的水準を高めて国家競争力を高め、伝統文化の教育を強化することによって、民族文化と世界文化の調和を図り、国際理解教育と平和教育を活性化し、地方化と世界化を同時に追求する」[1]という教育改革案を発表して、国際理解教育と平和教育の観点を明示し、21 世紀に備える国際化・情報化教育の重要性を強調した新カリキュラムを提示した。しかし、韓国を含む世

界各国の教育政策は、自国の実利的利益追求と伝統文化を守って発達させるための国家主義教育の視点がグローバル教育の視点より強調されていることが問題として提起される。特に、自民族中心の意識と文化に対する固定観念が児童期に形成されるという理論[2]にふまえて、児童の発達段階と水準にあう小学校段階のグローバル教育カリキュラム編成と授業実践は国際化時代を生きていく子ども教育のため切実に要求される。

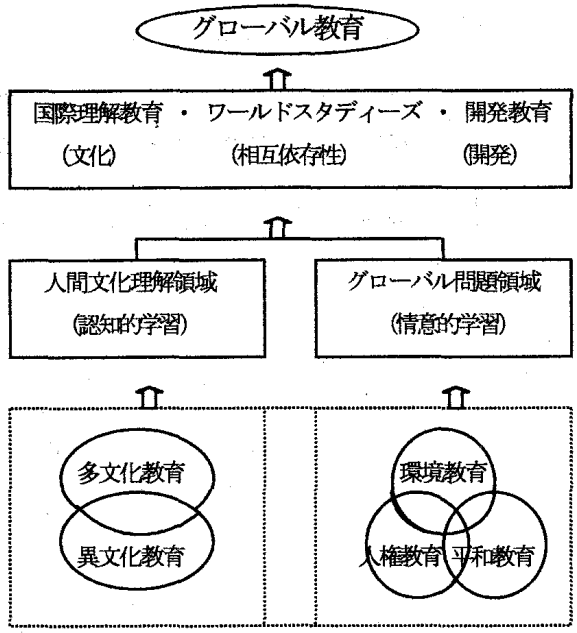
したがって、本稿は、グローバル教育に関する先行研究の諸理論を比較・分析してグローバル教育のために必修的である 4 つの学習領域を提示した[3] W.M. クニープのグローバル教育カリキュラム編成理論に基づいて[4]、韓国小学校社会科カリキュラムと授業モデルの開発に本研究の目的をおく。

1.2. グローバル教育の基本性格

国際理解のための教育として国際理解教育、グローバル教育、ワールドスタディーズ、開発教育、多文化教育、異文化教育、平和教育、環境教育、人権教育等、様々な形態の「国際教育」[5]が世界いろいろの国で実施されている。しかし、この各分野は人間主義の基本精神を基にして他国の文化を理解し人類の繁栄を図る教育目的側面と、社会現象を科学的に分析し問題解決能力を育む教育方法側面で、大きな相違点はない。ただ、教育内容選定と研究接近方法において人間の多様な文化と独自性を重視する多文化教育や異文化教育の人間文化理解領域と、人間の生存を脅威するグローバル問題を扱える環境、人権、平和等のグローバル問題領域で分類できる。

国際理解教育、開発教育、ワールドスタディーズも人間価値文化領域とグローバル問題領域を含む統合的領域であるが、それぞれの教育内容の重点に差異がある。即ち、国際理解教育はグローバル問題を扱いながら人間の認知的側面を強調し、開発教育は他国・他民族の文化的独自性を尊重しながらグローバル問題を解決する情意的側面を強調している。ワールドスタディーズは、諸「国際教育」の内容を含む統合的領域であるが、地域の限界性がある。また、各々の領域が人間価値文化領域とグローバル問題領域で区分されても同じ主題が重なっている。即ち、<図1>のように人間文化理解領域の多文化教育は、人間の尊厳を重視する人権教育を重要な教育内容で扱っている。そして、環境教育では生態系学習だけではなく、多様な地域と文化の特性との相互関連性をシステム的に捉えて地球環境の開発や保存を図っている。

したがって、本稿では、「グローバル教育」用語を諸「国際教育」領域を統合し、地球社会全体を一つのシステムとして捉えて、人類の文化価値と人間の生存を脅威しているグローバルイシューと問題を相互関連の中で理解し、解決する統合的概念として定義しておく。



<図1>グローバル教育の学習領域

2. 社会科カリキュラム編成の理論的考察

2.1. グローバル教育としてのW.M.クニープの社会科カリキュラム編成原理

先行研究に対するグローバル教育の教育内容と教育方法を分析すると、子どもの認知的側面に焦点をおいた文化理解的方法と子どもの社会問題解決能力を育む情意的側面に焦点をおいた問題解決的方法で類型化できる[6]。しかし、グローバル教育は統合的内容であるので、このような単純な構図では相互依存的地球社会の諸現象を把握するのに限界があると思われる。したがって、筆者はグローバル教育の目標面で認知的・情意的側面を統合して学問的研究内容と方法を文化理解とグローバル教育問題の学問要素に統合し、諸社会現象

の相互依存性を重視するシステム認識の社会科カリキュラム編成方法を新しく提示する。

システム認識のカリキュラム編成方法として、W.M.クニープが提示したグローバル教育としての社会科カリキュラム案を学習目標、学習内容、学習方法の視点から分析すると、次のような特徴が明らかになる[7]。

学習目標は、子どもが社会現象に対する知識と能力形成から価値と社会参加の態度を育むように配列している。学習内容は子どもの発達段階による伝統的経験拡法の系列性を基にすると共に1学年からグローバル意識を重視するグローバル問題を主題学習として提示している。学習方法は、社会機能の理解から社会問題解決に、受動的学習から能動的学習活動ができるように配列している。また、グローバル教育のスコープとして人間価値、グローバルシステム、グローバルイシューと問題、グローバル史の4つの領域が設定されている。即ち、この4つの領域は、子どもが社会現象の本質的要素として人間価値を探究するように設定され、この人間価値を探究するために社会的機能の相互関連性を把握するグローバルシステムに対する認識を高め、グローバルシステムの発展過程を歴史的に考察すると共に、未来のグローバル問題を解決する能力を育むように設定されている。

W.M.クニープの社会科カリキュラム編成原理をシークエンスとスコープの原理側面で分析すると、次のようになる。

1点、社会科カリキュラムでグローバル意識を高めるグローバル教育の必修領域として人間価値、グローバルシステム、グローバルイシューと問題、グローバル史を提示している。

2点、概念的テーマ、現象的テーマ、永続的テーマを社会科カリキュラムの編成原理として提示している。概念的テーマは学習内容を構造的に組織する知識の中心概念であり、現象的テーマは学習の範囲を限定する対象として行為者と構成要素、事件に制限している。永続的テーマは社会諸現象と関連されたグローバル問題に対する解決方法や解釈を提示するテーマに焦点おいている。

3点、グローバル教育のスコープである4つの学習領域から社会科カリキュラム編成の内容要素である5つの中心概念が概念的テーマで選定されている。即ち、文化の概念は人間価値領域で、相互依存性の概念はグローバルシステム領域で、希少性と葛藤の概念はグローバルイシューと問題領域で、変化の概念はグローバル史領域で抽出して提示された。したがって、概念的テーマが学習の単元で設定されている小学校低学年段階で、もうグローバル教育の各領域に対する基礎的な学習が行うように編成されている。

4点、小学校カリキュラム構成においてグローバル問題を全学年にかけてカリキュラム内容に別度に提示している。これは、子どもの生活経験をふまえて、環境、平和、開発、人権等の永続的テーマの学習を1年から6年まで学年ごとに編成して、子どもの時からグローバル意識を高める授業実践がなされるように構成されている。

2.1. グローバル教育としての韓国小学校社会科カリキュラムの性格と課題

小学校では、現在6、7次カリキュラムが適用されているが、本論では2000年度から施行されている7次社会科カリキュラム[8]に関する性格と課題を分析する。

小学校社会科では、「子どもたちに生活周辺の社会的事実と現象について関心と興味を持たせ、生活と関連した基本的知識を習得して、これを実生活に適用できるようにする。また、社会現象を正しく判断し行動する能力を育て、民主市民としての基本的資質を涵養することに重点をおく」[9]として、小学校社会科の目標と性格を、社会的事実と現象について関心と興味、生活と関連した知識適用、社会現象を正しく判断する能力に重点をおいていることを明らかにしている。

また、小学校社会科内容構成においては、「社会科は町、市・道地域、わが国の共同生活様子と文化、そして、歴史、政治、経済、社会等、いろいろな観点で統合的に選定・組織して知識・経験・生活等の関連が適切にできるように構成する」[10]として、小学校社会科教育内容を統合的に編成するという方向が提示されている。このような社会科の目標と内容を踏まえて構成された社会科カリキュラムを、グローバル視点で分析すると、次のような課題が提示される。

1点、教育目標では、民主市民や社会問題解決能力の育成という時代変化に応じるように提示されたことは望ましいであるが、グローバル教育の基本視点である相互依存性を強調するシステム認識の目標が提示されていない。また、社会現象の認知的知識

の習得に焦点をおき、価値、態度等世界人々との相互依存関係で必要な情意的目標が弱いのである。総合目標で述べている民主市民というのは、グローバル視野を持ち、グローバルな行動が要求されるが、社会現象を単純な見方として社会機能を把握し知識を習得することだけでは、相互依存の社会システムを理解し、グローバル問題を正しく認識し問題解決能力を身につけることができない。そして、グローバル教育としての社会科教科目標は認知的学習の目標ではなく、変化する社会現象に適応することができる情意的な目標に重点をおくべきである。

2点、教育内容では、変化する社会現象を反映するグローバル教育要素がカリキュラムに直接的に取り組まれていないことである。スコープにおいて、7次社会科カリキュラムで提示した人間と空間、人間と時間、人間と社会領域は、ただ、以前のカリキュラムで適用した政治、経済、社会、文化的内容を統合した構造的知識の内容になっている。W.M.クニープのカリキュラムでは、人類が直面したグローバル問題の解決を社会科教育の独立された単元で取り上げている。しかし、韓国の7次社会科カリキュラムでは、グローバルイシューと問題学習が独立された単元ではなく、他の単元に融合的に含んでいるから効果的なグローバル学習の展開ができないことである。また、W.M.クニープはグローバル問題を永続的問題の主題で選定して、小学校1年から学習ができるようにカリキュラムを編成している。したがって、子ども自身を中心に町・村、市・道、国家、世界という既存の系列性を維持しながらも、グローバルなテーマの教育内容をカリキュラムに組織するべきである。

3.2. グローバル教育としての小学校社会科カリキュラムの開発モデル

社会科の教育内容は、社会科の諸学問領域である地理、歴史、公民の内容をスコープで設定し、子どもたちの発達段階と経験世界を考慮するシークエンスで構成する。しかし、家族関係、生産・分配・消費、交通、通信、宗教、娯楽、政治、教育、表現等、社会機能的要素をスコープで構成することもできる。韓国の小学校社会科カリキュラムは、5次までは社会機能中心の教育内容で構成されたが、6次カリキュラムからは諸学問分野を3つの領域に統合して構成した。即ち、地理領域として人間と環境、歴史領域として社会・文化、公民領域として共同生活の領域で設定し、7次カリキュラムでは人間と空間、人間と時間、人間と社会領域で系統化させた。これは、町、市・道地域、わが国の共同生活の様子と文化、そして、歴史、政治、経済、社会等いろいろな観点で内容を統合的に選定・組織したことで、小学校社会科教育内容の構成方向が体系的に提示されたとみられる。しかし、教育内容面では、前節で指摘したようにグローバル視野を育てるグローバル教育内容が直接組織されていないことで、次の4つの観点を重視してグローバル教育としての小学校社会科カリキュラムを開発する。

1点、社会現象の中核的知識内容を構造化する中心概念として、文化、相互依存性、葛藤、変化の4つの概念を選定する。W.M.クニープは5つの中心概念を提示しているが、グローバルイシューと問題領域の葛藤と希少性概念は相互関連性が深いと思われる。即ち、グローバル問題である資源開発で、限定されている資源を開発して自国の利益を図ろうとする開発主義論者と、この資源を保存して人類の生存によい環境を守ろうとする環境論者との関係は、いつも葛藤と紛争が起きる。資源の不足に起因する葛藤は相互相関関係であるので、葛藤を中心概念に選定し、希少性はその関連ある下位概念として捉える。したがって、開発カリキュラムでは、学習で獲得すべき社会現象の中心概念を、文化、相互依存性、葛藤、変化の4つで設定して提示する。

2点、スコープとしては、7次カリキュラムの人間と空間、人間と時間、人間と社会の領域を、W.M.クニープが提示した4つの領域に基づいて、人間と空間、人間と時間、人間と社会、人類と世界領域で設定する。これは7次カリキュラムの学習領域が変化する社会現象を反映したW.M.クニープの学習領域と密接な関連がある。即ち、W.M.クニープの人間価値領域は人間と空間、グローバル史領域は人間と時間、グローバルシステム領域は人間と社会の領域に分類する。そして、7次カリキュラムがグローバルイシューと問題の内容を直接に反映されていないことから、人類と世界を独立した領域で設定する。

3点、シークエンスとしては、7次カリキュラムをふまえて伝統的な経験拡大法に基づきながらもグローバル要素と関連させて学習内容を構成する。即ち、3学年は市地域、4学年は道地域、5学年は国家、6学年は国家と世界という子どもの経験を重視しながら、地域社会と世界を結んで授業を取り組むこと

である。

４点、グローバル教育の中心的な内容であるグローバルイシューと問題のテーマを学年ごとに独立した単元で組織する。W.M.クニープはグローバルイシューと問題のテーマを、平和と安全、開発、環境、人権で提示している。これは今日人類において重要な生存の問題として捉えて、独立したテーマ学習として取り組んでいる。したがって、子どもたちの発達段階に応じるように、このテーマを学年ごとに体系的に配列して組織する。３年生は世界環境問題、４年生は世界平和と安全問題、５年生は世界開発問題、６年生は世界人権問題を反映する。そして、カリキュラムが統合的に運営されている１-2 学年は、「地球は私のホーム」単元を「賢い生活」教科に独立された単元で編成してグローバル意識を早期に身につけるように編成する。このようなカリキュラム開発の観点に基づいて、学年別単元構成を体系化すると、次の＜表１＞のようになる。

＜ 表１ ＞ 開発カリキュラムの学年別単元構成

領域	学年／中心概念	1・2学年	3学年	4学年	5学年	6学年
人間と空間	文化	地球は私のホーム（グロ-バル意識単元）	市地域の様子と生活	道地域の様子と生活	国土の様子と国民生活	共に生きる世界
人間と時間	変化		市地域生活の変化	昔の都と文化財	祖先の生活文化	わが民族わが国
人間と社会	相互依存性		住みよい地域のための努力	社会変化と家庭生活	世界に広がるわが国の経済	わが国の民主政治
人類と世界	葛藤		世界環境問題	世界平和と安全問題	世界開発問題	世界人権問題

４．小学校社会科におけるグローバル教育の授業モデル開発

４．1．授業開発の視点

グローバル教育としての小学校社会科授業開発においては、W.M.クニープの社会科カリキュラム編成原理に基づいて授業事例を開発する。

スコープ原理に基づく授業開発においては、人間価値領域は人間と空間の地理学習を中心で文化概念の認識に焦点をおく。グローバル史領域は人間と時間の歴史学習を中心で変化概念の認識に焦点をおく。グローバルシステム領域は人間と空間の公民学習を中心で相互依存性概念の認識に焦点をおく。グローバルイシューと問題領域は人類と世界という新しい領域として、平和と安全、開発、環境、人権学習を中心で葛藤概念の認識に焦点をおく。そして、このようなグローバル学習を展開する基本視点として、人間の同質性と多様性、相互依存性を重視するグローバル意識領域を設定して授業事例を開発する。

シークエンス原理に基づく授業開発においては、学年ごとに子どもの思考発達段階に応じる学習素材を選定してグローバル意識を涵養するように構成する。学習目標と学習方法において、低学年は、教師の主導的な指導による単純概念認識や社会機能理解に焦点をおき、知識と能力の目標を強調する。高学年では、子どもの能動的な学習による総合的概念認識に焦点をおき、グローバルな価値受容と社会参加目標を強調する。学習内容において、低学年は子どもの身の回りの社会現象や生活素材の探究活動を通して、文化の主体である人間の普遍性と多様なグローバル世界を意識することができるように授業を構成する。高学年は子どもに関わっている生活問題だけではなく、人類共同の問題を総合的に探究し、グローバル問題を解決する態度形成や能力育成に焦点をおいて授業構成をする。

＜表2＞　グローバル教育の授業モデル案

学習領域	内容要素	中心概念	学習テーマ	授業事例名	学年 1−2	3	4	5	6
人間と空間	人間価値	文化	普遍的価値	人間の欲求	地球は私のホーム	0			
			多様な価値	ロビンソンクルーソ		0			
人間と時間	グローバル史	変化	人間価値	おいしいスパゲッティ			0		
			グローバルシステム	藁屋とアパート				0	
			グローバルイシューと問題	人の上に人をつくらず					0
人間と社会	グローバルシステム	相互依存性	経済システム	お米はどこから来たか		0			
			政治システム	世界平和と人類安全のために					0
			生態的システム	ともに生きる地球				0	
			技術的システム	行ってみたい国				0	
人類と世界	グローバルイシューと問題	葛藤	平和と安全	祖国は一つ			0		
			開発	乱開発と自然災害				0	
			環境	消え去る稀少動物		0			
			人権	国を失う人々					0

このような社会科授業の開発視点に基づいて、各領域別・学年別授業モデルを開発して＜表 2＞のように提示する。これらの授業モデル中から、グローバル教育の基本学習として、子どもに人間は同質的存在であることを認識させる「人間の欲求」[11]授業構成を取り上げて分析する。

4．2．「人間の欲求」に関する授業構成

① 単 元 名 ： 1 市地域の様子と生活

② 対象学年 ： 3 学年

③ 単元概観

低学年生(1−3年)の生活空間はまだ自分の家庭と町に限られている時期である。本単元では、子どもの視野を市地域まで広げて、自分が住んでいる地域の様子と人々が生きるのに必要なモノを互いに協力しながら獲得する過程を把握して、この世界は多くの人々が共に生きる社会であることを認識させるのに焦点をおく。グローバル教育としては、人間は生存に必要な基本的な欲求が同じである同質的な存在であり、その地域の自然環境や文化によって形成される独特な価値を持つ多様な文化が存在することを理解し、これを尊重する心を持たせる意図でこの単元を設定する。

④ 単元目標

・市地域の自然の様子と各機関の役割を理解する。

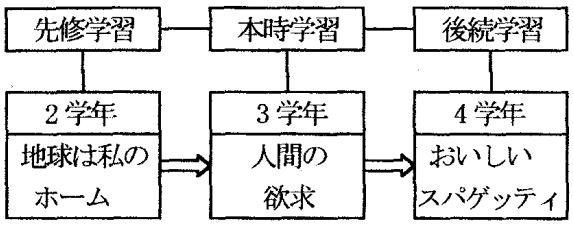
・モノの流通過程に対する資料収集、分析、図表作成方法等を実際に適用できる。

・他地域の多様な文化を理解し、人権を尊重する態度を持たせる。

⑤ 本時学習の系列性

学年の「地球は私のホーム」で、地球は大きい家のような世界であり、ここに住んでいる人々の基本的欲求と、それぞれの地域で独特に形成された民族文化の相異性に対するグローバル意識教育を学習した。この人間に対する基本的な認識をふまえて本時学習を取り上げる。

本時では、世界どこに住んでいても人々の基本的な欲求は同じであることから人間の同質性を感じ、ひいては、人間の尊厳性を大切にする態度を形成させる授業である。さらに、4 学年の「おいしいスパゲッティ」授業につながって、人間は多様であり普遍的価値を持つ同質的存在であることを認識するように系列性をもって＜図 2＞のように構成されている。



<図2>　本時学習の系列性

「人間の欲求」は、スコープにおいて、概念的テーマである文化概念に焦点をおくグローバル教育の基本学習であり、現象的テーマとして社会現象の行為者である人間本質の探究に焦点をおいている。シークエンスとしては、社会認識がまだ形成される前の低学年の子どもを対象にゲームや遊び等の体験的方法を通して、社会現象の主体者である人間が同質性を持つ同じ存在であることを理解させることを目標としている。

そして、本事例は、人間は多様な環境や地域に住んでいて生活方式が違っても、生きていくのに必要な衣食住の基本的な欲求を有していることを通して、人間に対する同質感と親密感を形成させる授業である。また、人間は多様な文化的・地理的環境の中で生活しながらも、多くの地球生物体とは違って共通的な考え方と生活方式を持っている社会現象の主体者としての尊厳性を認識し、人類の共存共栄を図る意識形成に繋がっている。即ち、人間生存の必須要素としては衣食住と空気や水などが、人間の幸せな生活のためには教育や愛情の要素が、だれにも必要であることを通して自分と他人との同質性を把握することができる。このことから本授業は、子どもが社会現象に対する固定観念を形成する前に導入することから、グローバル教育の基本学習として低学年で取り組むことが効果的である。

⑥単元展開計画

次時	学習主題	学習内容	資料
1	単元学習計画と市の様子調べ	子どもが住んでいる市地域の自然環境等、基本的なことを調べる。	地図、観察
2	絵地図で描く	市地域を絵地図で描き、記号で表わす。	記号図
3	公共施設の役割	役所、郵便局等、市民に便利さを与える各機関の役割を調査する。	見学訪問
4	生活必須品	我らの生活に必要なモノがどう私たちの家庭に入るかの流通過程を探究する。	モノのサンプル収集
5 本時	**モノに対する人間の欲求**	**人間の生存に必要な衣食住と幸福な生活に必要な教育、愛情等に対する欲求を探究する。**	地球儀、パズルセット
6-7	ロビンソンクルーソ	他地域の人々の衣食住生活を私たちと比較して違う文化があることを理解し受容する。	VTR資料
8	モノの生産方法	私たちの生活に必要なモノをどう生産するか探究する。	VTR資料 見学訪問
9-10	市場の役割	商店と市場の役割と利用の便利さを体験する。	体験学習

⑦ 本時授業展開案 ： 次項<表3>参照

⑧ 本時授業分析

本時の学習目標としては、3目標が明示されている。「人間はどこに住んでも皆が基本的欲求を持っていることを説明できる」は、人間が健康で幸せに暮らすためには飲食と水、住宅、愛情、教育等の必要なものを求める欲求は同じであることを理解する知識目標になっている。「人間が有する4つの基本的欲求に対する絵の学習資料を利用できる」は、パズルセットの資料を利用することによって、社会現象に関する資料や情報を利用する能力目

<表4> 「欲求」に関する授業案

事例名	1.欲求	学年	3	学習時間	1	中心概念	文化
学習目標	・人間はどこに住んでもみんなこの欲求を持っていることを説明できる。 ・人間が持っている4つの基本的欲求に対する絵の学習資料を利用できる。 ・共有する欲求をすべての人間に適用する共通的考え方を持てる。						

学習過程		学習内容	学習活動	学習方法	資料/指導上の留意点
導入	問題把握	・欲求の定義を明らかにし、人間に必要なモノのリストを作成する。	・欲求は人間が幸せに生きるため必要なものを求めることである。 ・欲求の項目をリストで作成する。	・個別学習	・目録リスト
展開	問題予想	・人間が生存するのに必要な基本的なものと、幸せな生活のため必要なものは何であろうかを予想する。	・生存に必要なものは一衣食住、水、空気等。 ・幸せな生活のため必要なものは一教育、愛情等。	・個別学習 ・ブレインストーミング	・パズルセット<資料1>参照 ・世界地図 ・地球儀 ・目録リスト
	問題探索	・パズルセットの絵の名前を黒板に書き、地図の上に表示する。 ・パズルセットの絵を説明し、問題把握段階で作成した必要なモノのリストにあるモノかを対照する。	・パズルセットの絵を完成して、その絵の名前を地図で探す。 ・パズルセットの絵の意味を探究して説明する。 ・導入段階で作成したリストと一致するかを比較する。	・ゲームのような遊び学習 ・グループ学習	
	問題検証	・同じ欲求を持つ人間と、宇宙生命体とどちらが理解しやすいかを確認する。 ・世界の人々の類似点と相違点は何であり、どう相互依存して生きているかを明らかにする。	・人間はどこに住んでいても同じ欲求を持っていることを宇宙生命体と比較して証明する。 －人間の共通性は何か。 －人間の相違点は何か。 －人間は相互依存して生きているか。	・グループ学習 ・ブレインストーミング	
整理	問題適用	・学校図書館や資料センターを利用して他文化の子どもに関する本を読んで、自分との類似点と相違点を発見する。	・パズルセットの絵に色を塗る。 ・年中、世界童話を読んで人間の類似点と相違点を自ら発見して、人間の同質性を認識する。	・個別学習	・学校図書館や資料センター

標になっている。「共有する基本的欲求をすべての人間に適用する共通的考え方を持てる」は、人間がどこに住んでいても生存に必要な基本的欲求と同一な感情を持っていることより、人間の同質性を感じ、意識させる態度目標になっている。そして、人間としての同質感は、他民族・他文化に対する理解の幅を広げ、自分と違う環境で生きる人々に対する人間尊重の姿勢を形成させると共に、世界の相互依存性と多様性を認識させる基本要素になっている。学習過程としては、導入部分では欲求の概念を定義する問題把握段階、展開部分では問題の予想・探索・検証段階、整理部分では適用段階に区分される。

導入では、人間は幸せに生きるために必要なものを求める欲求を持っていることを理解し、人間の基本的欲求として必要とするモノに関するリスト作成を個別にすることによる問題把握がなされている。

展開部分では、すべての人間が生存するのに必要な基本的なものと、より便利であり幸せな生活のために必要なモノに関する問題予想、問題探索、問題検証がなされている。最初は、人間が生きるには衣食住のような必須不可欠なモノがあり、教育、愛情のような幸せな暮らしに必要なモノもあるという人間探究としての予想段階になっている。次の問題探索段階では、クラスを２-３人のグループに分けて、パズルセットの絵を完成させる。パズルセットの絵を完成するとその絵の名前を黒板に書き、地図の上に位置を表わす。そして、パズルセットの絵が表していることは何であるのかを説明し、問題把握段階で作成したリストにあるモノかを確認する。例えば、パズルセットの住宅の絵には南アメリカの単語が書れている。そして、この南アメリカを世界地図で探し、その絵は何を意味するかを探索して、家族が幸せに暮らすため住宅が必要であることを把握する。さらに、導入段階で作成した欲求と同じであるかを対照したりすることによって様々な資料と情報を利用する。検証段階では「同じ欲求を持つ人間と、毎時間電気衝撃が必要な宇宙生命体とどちらが理解しやすいか」という問いについて、人間は地球の他生物体とは違う共通の感情をもっているので、理解しやすい存在であることを確認する。また、家族相互間で助け合い、寄り合いながら生きていく相互依存関係を通して、同質性を持っている世界の人々も相互依存しながら生きていくべきであることを意識化し、そのような態度を身につけるように指導する。

整理部分では、学校図書館や資料センターを利用して他文化に属する子どもに関する本を読んで、自分との類似点と相違点を発見して、人間はだれもが自分と同じ考えを持っている同質的存在であることの一般化がなされている。子どもは多くの外国童話を読み、童話の内容を通して他国の子どもたちの生活方式を理解し、自分の生活と比べて共通点と相違点を発見していく。そして、共通点がある文化はもっと親しく感じ、相違点がある文化はその違いの背景を探究し、尊重するグローバルな視野と態度を形成するように指導する。

このように本授業では、グローバル教育の基本学習として人間は国家、民族、文化などを異にし、多様な世界で居住していても、人間の欲求は誰もが同じであることの理解を通して、人間に対する同質感と尊厳性を持たせる態度形成がなされている。このような本授業事例における学習原理としては、次のように指摘できる[12]。導入部分では、人間の欲求に対する概念をその概念に内包する具体例を指示する定義方法に基づき問題把握がなされている。展開部分では、現象的テーマの行為者である人間の本質に対する仮説を設定し、その仮説吟味のために様々な資料や情報を活用する。さらに、それらの資料や情報の比較分析によって人間は地理的、文化的差異にもかかわらず皆が同じ欲求を有するという仮説を検証し、人間存在の基本規定の意識化がなされている。即ち、人間の本質に関する仮説検証という探究方法に基づく問題考察がなされている。整理部分では、獲得した知識を他の事例に適用し、いろいろな文化の共通性の一般化を図ると共に個々の文化の多様性を容認し、尊重する態度形成がなされている。即ち、探究方法に基づく単一の一般化を他の事例への適応による複数の一般化へ発展させる問題適応がなされている。

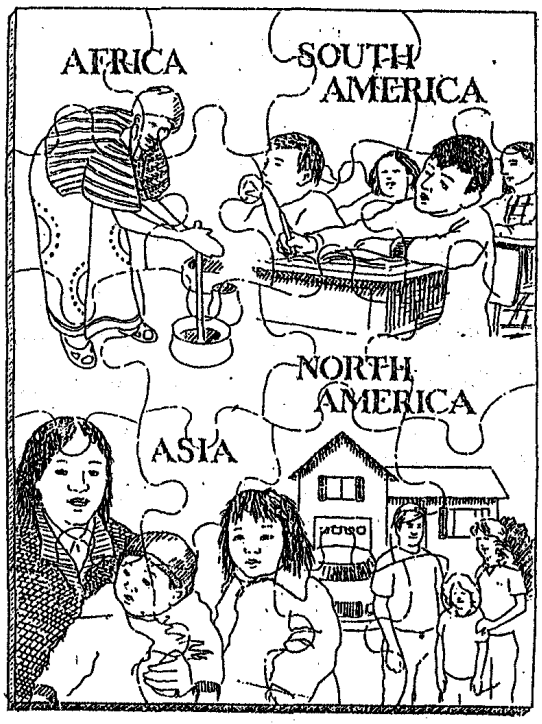
５．おわりに

現在の社会科カリキュラム編成は、子どもの発達段階と生活経験を基にして学習内容を組織する伝統的な経験拡大法が主要理論的背景になっている。即ち、子どもを中心で家族、学校、地域社会、国家、世界という周辺的人間関係から異質的な価値と文化を学習するよう学年別に主題配列がなされている。韓国と日本の社会科内容体系も、国家

や世界意識は高学年以後に形成されるから低学年では自分と家族の歴史から学習すべきであるという伝統的カリキュラム理論に基づいている。しかし、今日の科学・通信の発達による子どもたちの社会認識は、時間的・空間的次元を超えて習得され、子どもの興味と学習能力も高度になった。
それで、社会科の教育内容もこのように変化する社会現象と子どもの学習能力が反映されるカリキュラム編成が必要である。

したがって、本稿では、子どもの認識発達段階を重視する伝統的な経験拡大法のカリキュラム論に基づきながらも、時代的変化を反映するグローバル教育要素を低学年社会科に取り組むカリキュラムのモデル開発を試みた。そして、既存のカリキュラム内容にグローバル教育要素を融合的に編成して、小学校低学年でもグローバル教育を十分に実践できる授業構成の方法を提示した。

<資料１>パズルセット



註)

1) 教育部、『新教育体制樹立のための教育改革案』、ソウル、1995年

2) Donald N. Morris, "Global Education in Elementary Schools", Social Education, V. 41, N. 1, 1977, p. 39.
Lee F. Anderson, "An Examination of the Structure and Objectives of International Education", Social Education, V. 32, N. 7, 1968、pp. 639-647.

3) Jaimie P. Cloud and Lynn Parisi, "Defining Global Education : A Resource List", Social Education V. 50, 1986, p. 448.

4) W. M. Kniep, "Social Studies Within A Global Education", Social Education V. 50, 1986, pp. 536-42.
W. M. Kniep, " Defining A Global Education by its Content", Social Education, V. 50,1986, pp.437-46.

5) ユネスコ韓国委員会、『国際理解教育の手引き』、ソウル：三省印刷、1988、p. 7.
国際教育は、ユネスコの国際理解教育とは違う国際理解のための様々な類型の国際教育を含める意味である。
Derek Heater, "World Studies : Education for International Understanding in Britain", Harrap London, 1980

6) 永井滋郎、『国際理解教育』、第一学習社、1989、p. 143.
大津和子、『グローバルな綜合学習の教材開発』、明治図書、1997.

7) 田鎬潤、「グローバル視点に基づく社会科カリキュラムの構成原理」、社会系教科教育学会、『社会系教科教育学研究』、第９号、1997、pp. 55-62.

8) 教育部、『社会科教育課程』、ソウル、1998、p. 31.

9) 教育部、『初等学校教師用指導書―社会科』、1997、p. 8.

10) 同上書、p. 8.

11) 本授業は、アメリカの Social Science Education Consortium の L. R. Singlston によって開発された「People Puzzles」授業を筆者が再構成した事例である。

12) 本授業事例は、中村哲の『社会科授業実践の規則性に関する研究』で、教授学習過程に関する規則性に基づいて授業構成内容と展開方法を分析した。